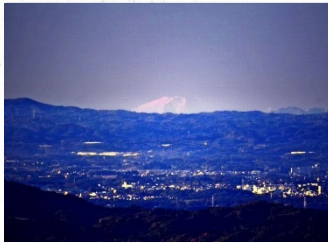


文化

雲一つ無い晴の空、冷え切った空気がどこまでも澄んでいた。眼下には福島県郡山市の街並み。この間、東はるか南の方、青黒く浮かぶ秩父の連峰に目を凝らすと、稜線上で豆粒ほどの点が白い光を放つ。間違いない。富士山だ。福島の地から肉眼でその雄姿を望んだ。

双眼鏡で確認すると、八ていいる人も少なくない。市の自宅から避難し、岩を切った。冠雪している。朝の光を浴び、白く輝く雲峰は神々しい。何より、それが300*ものかなたにあると思つて、神秘的にも一味違った寒さを忘れ、カメラに望遠レンズをセットする。かじかむ指でシャッター

を切った。あれから5年たつ。この間、東北は未曾有の災害に襲われた。いまだ身を切るような苦難にあがき、もがい



福島県羽山山頂から見た富士山(2009年11月4日撮影)

労のためかじかむ指も希望はある。この福島は富士山が見える北限の地。そして、日本の頂きこそ日本人にとって希望の象徴であるはずだ。2015年が真の復讐の年になるよう願って、しばし私の「富士山遠征記」にお付き合いいただきたい。

福島から拝む希望の富士

◇稜線上に浮かぶ白い光 復興への願い北限から込め◇

千葉 茂樹



私は一関市の出身だ。幼い頃から星を見るのが好きだった。小学校高学年になると毎晩のように天体望遠鏡で星空を見上げていた。太陽を除けば全天で最も明るい恒星シリウスの輝きに魅せられ、その次に明るいりゅうこつ座のカノープスを探した。

登山経験生かす挑む やがて興味は地学に移り、福島大学で地質学を専攻した。今に至るまで専門は磐梯山や吾妻山など福島火山の地質調査と研究。安達太良山の火山灰を追いかけて、阿武隈山地に足を運んだ。趣味を兼ね、何度も福島の山に登り、写真を撮った。

ある時、羽山(羅山)に登り山頂で思った。ここからなら富士山が見えるのではないかと。羽山の標高は897.1m、富士山は南南西に位置し、その方向にさほど高い山はない。条件次第では富士山の山頂が拝めるはずだ。

古来、福島県南部の山々から富士山が望めるとの伝承があった。だが、明確な証拠や写真の記録はなかった。2000年(ごう)、羽山やその隣の日の山(羅山)にある自治体は競って「北限の富士山」の撮影一番乗りに熱を上げた。腕に覚えのあるカメラマンが何人も挑む。日山や羽山から撮られた写真もあったが、鮮明な姿は撮影できなかった。

私は登山の経験から、どのような時に遠方の風景が良く見えるか心得ていた。福島では晩秋、北から冷たい風が急速に入り込む日がある。この寒風が地表付近の汚れた空気を一気に払いのける。すると、高い山の上から信じられないほど遠くまで視界が開けるのだ。09年の11月上旬の夕方、真冬のような寒気が流れ込んで来た。チャンと到来。すべ文度し、翌日の夜明け前から羽山に登った。山頂へ着いたのは午前6時半。そこは一面の銀世界だった。遠方には信じられないような光景が広がった。群馬の連峰の尾根や谷までがはっきり見えた。

日本なら誰もが富士山の強い思い入れや、忘れ難い思い出があるのではないかと。私も中学生のころ、スポーツ少年団全国大会に岩手代表として参加。その際に富士山に登ったことがある。深夜、星が降るよう輝いていた。青白く瞬くスバルの美しさは今も忘れられない。

そんな思い出を振り返りつつ、30分ほど撮影に没頭した。はっと我に返ると、冷え切った手と足の先の感覚がほとんど無くなっていた。私は県立リ

高校で理科教師として勤務する。その日は登校する必要があった。急いで撮影を切り上げ、山を下りた。数日後、撮影した富士山の写真を写真のスタジオで校舎の壁に張り出すと、普段は理科に関心が薄い生徒まで熱心に見入ってくれたのがうれしかった。

父の言葉思い出して 東日本大震災が起きた時、私は福島市避難にいらした。強弱の揺れを繰り返して、1時間以上も続いた。大地がうねり日本が沈没するかと思つた。さらに、原発事故が追い打ちをかけた。猪苗代町へ避難した。故郷の父も震災後、体調を崩し間もなく亡くなった。

再び雄姿を望む 震災後、落着きながらまた山に登るようになった。しかし、あの時ほど澄んだ空気に包まれたことは一度も無い。中国からの微小粒子状物質「PM2.5」のせいだろうか。夜空を眺めていても、少年のころ見たシリウスのまはゆい輝きには出会うべくもない。

それでも私には標がある。羽山からさらに10*ほど北にある元塚山から再び富士山の雄姿を望むことだ。羽山以上に条件は厳しいが、地形から考えれば可能性はある。希望を失っては何も始まらない。私は富士山と震災からそう学んだ。(ちば・いけ) 福島県立小野高校平田助教(論)

震災後、富士山を撮った写真について地元の人から何度も声をかけられた。知り合いもいれば、初対面の人から富士山が見える。そのことにとだけ勇気付けられたか。その言葉は私の希望でもなかった。

父の言葉思い出して 東日本大震災が起きた時、私は福島市避難にいらした。強弱の揺れを繰り返して、1時間以上も続いた。大地がうねり日本が沈没するかと思つた。さらに、原発事故が追い打ちをかけた。猪苗代町へ避難した。故郷の父も震災後、体調を崩し間もなく亡くなった。

再び雄姿を望む 震災後、落着きながらまた山に登るようになった。しかし、あの時ほど澄んだ空気に包まれたことは一度も無い。中国からの微小粒子状物質「PM2.5」のせいだろうか。夜空を眺めていても、少年のころ見たシリウスのまはゆい輝きには出会うべくもない。

それでも私には標がある。羽山からさらに10*ほど北にある元塚山から再び富士山の雄姿を望むことだ。羽山以上に条件は厳しいが、地形から考えれば可能性はある。希望を失っては何も始まらない。私は富士山と震災からそう学んだ。(ちば・いけ) 福島県立小野高校平田助教(論)